

# 『とりかへばや』と宇治十帖

——男性達の「涙」の比較から——

野見山 優

## 一 はじめに

現存『とりかへばや』（以下『とりかへばや』）は女主人公の苦悩と栄華の物語として評価されてきたために、女主人公である女君を中心として論じられてきた。しかし、近年は主人公である女君が抱く苦悩の要因となり、物語を動かしている宰相中将に対する関心が深まっている。主人公のきょうだい二人が栄華を極め、物語が大団円を迎える中で一人嘆き続ける宰相中将は「烏滯者」として論じられることも多かったが、彼の持つ役割は非常に大きく、その重要性の再検討が行われている。かつて稿者は宰相中将の特徴である「涙」を流す場面を中心に、『とりかへばや』内に登場する男性達を比較した所、<sup>2)</sup>宰相中将像を基として帝と男君の人物像が作られたとの結論に至った。本稿では更に『とりかへばや』以前の物語に登場する人物との比較を行ない、その影響を明らかにする。

宰相中将の人物造型は、「色好みの貴公子」として、様々な物語の男主人公達の要素を含んでいるが、特に『源氏物語』宇治十帖（以下宇治十帖）と比較され（匂宮）型であると指摘がなされてきた。「まめ」な女君と、「色好み」な宰相中将が、四の君を巡って三角関

係を形成するという点が、「まめ」な貴公子の代表格の薫、それに対する「色好み」な匂宮という構図と類似していると考えられてきたが、宰相中将と匂宮の類似を具体的に明らかにした論は少なく、西本寮子氏が「月草」という語に着目し、匂宮・中の君の関係を宰相中将・女君に投影していると述べた程度である。しかし、近年では久保堅一氏が宰相中将に薫からの影響が見られ、従来述べられてきたような（薫）型の女君と（匂宮）型の宰相中将という構図だけでは考えられないと指摘され、ここで今一度宇治十帖から『とりかへばや』へ、男性達の人物造型へどのような影響が見られるか、再考する必要がある。

本論文では、右に挙げた久保氏の論に則り、匂宮像のみでなく薫像も受け継いだキャラクターとして宰相中将を捉え直し、その両者との比較を通じて宰相中将の人物造型を考察する。具体的には宰相中将の大きな特徴であった「涙」が、宇治十帖ではどのような場面で登場し、薫・匂宮の「涙」にはどういった特色があるのかを分析し、そこから宇治十帖の薫・匂宮から宰相中将への影響を検討していく。

## 二 薫像を継承する宰相中将

薫は出生の秘密を抱える厭世的な貴公子である。「色好み」な匂宮と比較し「まめ」であるのが大きな特徴であり、従来その出生による内省的な性格についての論が多い。大君、中の君、浮舟に迫る方法も、所謂「色好み」な匂宮と宰相中将とは大きく異なっている。薫はまず、女性達に対して自分が好色家ではないことを相手に告げること、女性達に接近していく。

「かやうにはもてないたまはで、昔の御心むけに従ひきこえたまはんさまならむこそ、聞こえうけたまはるかひあるべけれ。なよび気色ばみたるふるまひをならひはべらねば、人づてに聞こえはべるは、言の葉もつづきはべらず」とあれば、……

〔源氏〕 権本、一九七

八の宮の死後、宇治を訪ねた際の大君・中の君姉妹に向けての薫の発言である。薫は亡くなった八の宮と自分の親しき、彼から姉妹を託されたことを相手に告げ、姉妹が拒否できないように接近している。また、同時に「なよび気色ばみたるふるまひをならひはべらねば」と、自分が好色めいた部分を持たないことをアピールし、その警戒を解くよう説得している。

自分に対する周囲からの「まめ」という評価を使って相手を口説く場面は他にも見られる。

「……心の引く方なむ、かばかり思ひ棄つる世に、なほとまり

ぬべきものなりければ、あらためてさはえ思ひなすまじくなむ。世の常になよびかなる筋にもあらずや。…(中略)…そのほかの女は、すべていと疎く、つつましく恐ろしくおぼえて、心からよるべなく心細きなり。なほざりのすさびにても、懸想だちたることはいとまばゆく、ありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にしめたる方のことは、うち出づることも難くて、恨めしくいぶせくも、……」

〔源氏〕 総角、一三〇、一三二

右記の場面では、大君本人に拒否されてしまった薫が、女房を使って説得を試みようと考え、大君付きの女房弁に対して大君への恋情を長々と訴える。弁は大君の意向(中の君と薫を結婚させること)を告げるが、その弁に対して薫は自分の気持ちの深さを語る。その際、前述の場面に自身が好色家ではないことを繰り返し語る。本来は女性に関心を持たない自分がここまで真剣なのだ、と弁を説得するのである。このような発言から、薫はただの「まめ人」のではなく、好色めいた恋敵である匂宮との違いを意識させ、誠実な自分へと女性達の心が動くのを期待しているとも考えられる。薫が自身を「まめ」という裏側には、相手の女性に匂宮を意識させる意図があり、この薫の計算高い面は、『とりかへばや』の男君が持っている計算高い性格に近い部分を感じさせる。

一方で匂宮はその性格を「すきたまへる親王」などと評され、好色家であることが周知の事実とされており、薫が自身を好色家ではないと発言することにはこの匂宮に対する意識が働いていると考えられる。このような両者の構図は、『とりかへばや』での女君と宰

相中将に対してもあてはまり、宰相中将が初めて登場する場面から「人柄のいとあだなるに」と言及されるように、「まめ」で優れた女君と、「色好み」でその比較対象である宰相中将がはつきりと対比させられている。

しかし、薫は浮舟のこととなるとやや油断した面が見える。浮舟の存在を周囲に知られていないこともあり、「たとしへなくのどやかに思しおきてて」と余裕な様子で、宇治にしばらく訪問しないこともあった。この間に句宮が浮舟と関係を結んでしまうのだが、久保氏はこのように薫が独占欲はありつつも悠長に構え、結果として女君を失う点が、『とりかへばや』で宰相中将が女君を手に入れた後、余裕を持つようになり、結果女君失踪に続いていく様と類似しているとする。宰相中将も、女君をわがものとした後は、「今はおだしくかくて見るべきものとうち解け思しては」と油断して、女君の住む宇治への訪問が疎かになる。宇治に住む秘密の女性として浮舟・女君を独占、油断した結果の喪失、その喪失を抱えたまま物語が閉じる所まで考慮すると、久保氏の指摘のように、宰相中将像に薫の影響が見られるとの考えは首肯できる。

また、薫と宰相中将のもう一つの共通点として、最初の思い人との関係は成就しなかったことも挙げられる。薫は大君と関係を結べぬまま大君を失い、その形代として浮舟に思いを寄せる。宰相中将に關しても、彼が最初に思いを寄せたのが女装の男君であったことを考えると、最初の思い人である男君からの拒絶を経て女君を手に入れたことになる。薫は「まめ」と評される上に女性に対して一途な性格であり、大君の死後はその思いを浮舟へと移し、最後まで浮舟を思い嘆き続ける。相手を思い続ける物語の流れが、薫と宰相中

将には共通していると見えよう。宰相中将は前半部でこそ「色好み」である度々指摘されるものの、女君を失って以降の後半部では「まめ」と言われることもあり、最後の場面では周囲が大団円を迎える中で一人女君を思つて嘆く。<sup>6)</sup>この後半部の宰相中将の一途に女君を思い続ける性格は、薫と近いものがある。

宇治十帖と『とりかへばや』を、薫・宰相中将を中心として捉え直した時、そこに浮かび上がるのは思い人を喪失した男の物語、という話型の類似である。二作品共に最後は薫・宰相中将の嘆きで閉じられていることも、一途に思い続ける男性の物語として共通した要素を持っているからであろう。宰相中将が薫の執着心を継承しているのみでなく、『とりかへばや』自体が、薫が浮舟を失う物語を宰相中将が女君を失う物語に読み換えることよって成立したと言つても良いのではないだろうか。

### 三 涙をこらえる薫、涙を見せる句宮

宰相中将が薫の持つ執着心、そして全体の話型を継承していると考えられるものの、宰相中将の基本的な性格は句宮からの影響が大きいだろう。しかし、前述したように宰相中将と句宮の類似は、「まめ」な薫／女君と対になる人物であるという以上の指摘があまりなされておらず、具体的な指摘がないまま今日まで至る。宰相中将と言えば「色好み」と共にその過剰なまでに「涙」する性格が特徴であるが、そのような性格には恐らく既存の物語からの影響が大きいだろう。稿者はこれまで類似の指摘されてきた句宮からの影響が「過剰な涙」にあらわれているのではないかと考え、ここでは宇治十帖での薫・句宮がどのような涙を流しているかを分析し、宰相中

将像に迫ることとする。

『源氏物語』の涙については、鈴木貴子氏<sup>7)</sup>がまとめており、

正篇では光源氏を中心とした皆で涙する涙の共有が多く描かれ、感情共同体としての光源氏体制を支える構造となっている。

一方、宇治十帖では、人物が他者を観察するといった場合に多く描かれ、個々の涙が人間と人間との関係性を明らかにするものとして機能していく、微細な涙が描かれる。

と述べている。また、宇治十帖の薫・匂宮の涙の特色を、中村一夫<sup>8)</sup>氏は

薫の用例では大君および自身に関して「泣く」ことが多くみられる。また、八宮を中心とした宇治全般に関わることも涙を流す。そしてその内実を検討していくと、ほぼ全般に後悔の涙が多いことに気がつく。つまり薫が涙を流すのは、すでにどうにもならなくなったことを悔やんで泣くというのが目立っているのである。…(中略)…それに対し匂宮はどうであろうか。薫とは対照的に場面の状況に敏感に反応し、感情の高まりに応じて涙を流している。

と分析しているが、薫・匂宮の涙が物語内でどのような役割を持っているのかということまでは論じられていない。宇治十帖では薫・匂宮が涙することにどういった意味があるのか、その涙の持つ役割を具体的に検討していく。

宇治十帖内で和歌表現を除いて、確実に涙を流していると判断できる例は、薫が二六例、匂宮が一七例である。これは、『とりかへばや』宰相中将の和歌表現を除いて四五例であるのと比較し、両者共にかなり少ない数字と言える。ちなみに、その涙の対象を見てい

くと、匂宮と宰相中将が、自身の恋の相手である女君に対して涙することが多いのに対し、薫は、自身の出自を知る八の宮や弁の尼といった恋愛の相手ではない人物に対して涙する様子も描かれ、薫にとつての涙が、匂宮や宰相中将とは異なった性格を持つことが分かる。

薫の涙を整理すると、印象的なのが人の死に際しての涙である。宇治十帖の中で、薫は八の宮、大君、浮舟の死(当初薫は浮舟が亡くなったと勘違いしていた)に直面し、そのたびに涙を見せている。前述の中村氏の論にあるように薫の涙の特徴の一つ、「どうにもならないことへの後悔の涙」がこの死に際しての涙だと言えるが、その死や喪失への涙の中でも大きな違いが見える。八の宮の死の際には「おほかた世のありさま思ひつづけられていみじう泣いたまふ」と、著しく涙を流しているが、大君、浮舟に対しては、すぐに泣くことはない。薫は政治的な関わりもあり自身の出自を知る八の宮の死に対して涙を隠すことはないが、関係を世間に公にしない女君達の死に対しては世間の目を気にしてか、涙をこらえようとする様子が窺える。

次に、薫の涙の特色である「こらえる涙」を検討する。薫は涙を見せないようにするものの、結果としてこらえきれずに涙を流してしまうことが多い。次に当該箇所を挙げる。

いとあはれと思ひたまへる気色なるに、いよいよせきとめがた  
く、ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじとつつみたまへ  
ど、声も惜しまれず。

『源氏』総角、三二二六

今ぞ泣きまたふ。これも、いとかうは見えたてまつらじ、をこ  
なり、と思ひつれど、こぼれそめてはいとどどめがたし。

〔源氏〕蜻蛉、一二〇

さは、まところにあるにこそはと思すほど、夢の心地してあさま  
しければ、つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを、僧都の恥づ  
かしげなるに、かくまで見ゆべきことかはと思ひ返して、つれ  
なくもてなしたまへど、かく思しけることをこの世には亡き人  
と同じやうになしたることと、過ちしたる心地して……

〔源氏〕夢浮橋、三七八

他にも涙をこらえる例は存在するが、右に挙げた三例に共通するの  
は、波線部で周囲からの視線を薫が意識していることである。周囲  
の目がある中で涙することは、薫にとって非常に抵抗のある行為で  
あった。これらの用例から、薫の「涙」がどのような意味を持つも  
のであるのかが見えてくる。総角巻の例では、病床の大君に対して  
涙する自分の姿を省み、その姿が大君に「心細げ」に思われるので  
はないかと気にかけて涙をこらえようとする。この場面は、大君の  
亡くなる直前であり、涙が大君に与える影響の大きさを考慮したも  
のであるが、薫が自身の涙を「ゆゆしう」と感じていることに着目  
したい。次の蜻蛉巻は、浮舟失踪後、薫と匂宮が初めて対面する場  
面である。ここでは、匂宮の前で涙を見せることへ薫が非常に抵抗  
を覚えていることが注目される。薫は、自分の泣いている姿を匂宮  
が「をこ」と思うことを恐れているのである。薫と匂宮は互いを非  
常に意識し合っている関係であり、浮舟を巡ってはいわばライバル

関係にある。その相手の前で涙することを躊躇する薫の様子から、  
匂宮の前で油断している姿を見せたくないという薫の強い意識が窺  
われる。夢浮橋巻では、毅然とした態度の横川の僧都の前で一度取  
り乱した姿を見せてしまいが、相手がどのように思うのか判断して  
涙を抑えるように振る舞っている。このようなこらえる様子が描か  
れることで薫の涙はかえって印象的なものとなっている。夢浮橋巻  
では薫の取り乱す様子を好意的に捉え、普段の彼には見られない姿  
に浮舟に対する思いの強さを感じている。薫自身が自身の涙を消極  
的に捉え涙をこらえようとするのとは裏腹に、周囲はその「こらえ  
る涙」に好感を抱くのである。

薫の涙を評価しているのは横川の僧都だけではない。

音をのみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも見苦しくは  
あらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女ならばかな  
らず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひに思しよるも、  
なまうしろめたかりければ、……

〔源氏〕総角、三三八

大君の死去の後、泣き暮らし憔悴しきった薫の姿を見た匂宮は波線  
部のようにその美しさを評価し、「女ならばかならず心移りなむ」  
とまで感じる。憔悴する姿が美しく見えるという表現は常套句では  
あるものの、一貫して涙を隠そうとしていた薫が実際に涙する様子  
を目の当たりにした匂宮がこのような評価をすることはなんとも皮  
肉である。

このように薫の涙が「こらえる涙」なのに対し、匂宮の涙は異  
なった性格を持つている。もちろん匂宮も、周囲に対して涙を隠そ

うとするような場面が見られるものの、彼は自身の恋の相手である女君へ、その恋しさの表現として涙することができる。

まず、なかなか宇治を訪れることができなかった匂宮が中の君と対面する場面では、

「かかる所にいかで年を経たまふらむ」など、うち涙ぐまれたまへるを、いと恥づかしと聞きたまふ。

男の御さまの、限りなくなまめかしきよらにて、この世のみならず契りきこえたまへば、思ひよらざりしこととは思ひながら、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしきよりはとおぼえたまふ。

〔源氏〕総角、二八二、二八三と、傍線部のように涙を見せる。涙ぐむ匂宮の「なまめかしきよら」な姿を見た中の君は、傍線部「かの目馴れたりし中納言の恥づかしきよりは」と薫より親しみを持って匂宮に接するようになる。このような涙によって相手から親密に思われるような描写は「とりかへばや」でも描かれ、宰相中将が初めて登場する場面で、

わびしきままにこの君をいとよく語らひて、思ひあまるときは涙もつつまず憂へ泣きかくるさまの、人よりすぐれてあはれになまめきたるを、いとほしくあはれに、こと人よりはなつかしくうち語らひながら、我はいとうち睦びられず。

〔とりかへばや〕卷一、一八一、一八二

と傍線部にあるように涙で感情を露わにする宰相中将に対し、女君

が傍線部で他者よりも好意的な視線を向けている。匂宮は、女性達の前で感情を見せることに抵抗を感じているような描写があまり見られず、特に中の君の前では、浮舟のことを思い出して涙するようなこともある。このように恋しさを表面に出す上に相手に秘密を持たない匂宮の姿は、女君に対し何事も「隔てなく」話す「とりかへばや」の宰相中将にオーバースラップする。匂宮が「見せる涙」を効果的に用いているのが、以下の例である。次の場面では、浮舟との仲を阻まれた匂宮が、浮舟の女房の侍従に対し、浮舟への恋しさを語る。

わが御心地にも、あやしきありさまかな、かかる道に損はれて、はかばかしくはえあるまじき身なめり、と思しつづくるに、泣きたまふこと限りなし。心弱き人は、まして、いとみじく悲しと見たてまつる。いみじき仇をつくりたりとも、おろかに見棄つまじき人の御ありさまなり。〔源氏〕浮舟、一九二

これまで挙げてきた用例の中で匂宮が最も激しく涙している場面だが、彼はこの涙によって侍従の心を掴む。それが直接浮舟との逢瀬に繋がったわけではないが、涙により女房の心を絆していくのである。

匂宮の「見せる」涙と近い特色を持つのが宰相中将の涙である。匂宮同様涙を流すことに抵抗のない宰相中将は、四の君・女君・女装の男君と、思慕の対象に隔てなく涙する。涙の用例のほぼ全てがその相手への恋しさから来る涙であり、「泣く泣く」といった語の多用などから、宰相中将は過剰なまでに涙する人物として描かれて

いることが分かる。前述の匂宮との類似点としては、女房を涙で絆していくことが挙げられる。四の君の女房の左衛門に対しては、

左衛門がもとは、日に千度、みくらの山の所なきまで書き尽

くしたまふを、若やかにもの深からぬ心には、えも言はずあて  
になまめきたる気色して命も絶えぬばかり泣きわびたまひし暁  
を、いとあさからず心苦しと見たてまつりにし心の染みにしか  
ば、御文の隙なき言の葉などあはれにかなしげなるも、いとほ  
しく放ちがたく色めきたる心にも思へれば、……

〔とりかへばや〕巻一、二二〇

と、左衛門は涙とともに情熱的なアプローチをしていた宰相中将の姿を思い返し、涙に絆された形で彼を四の君の元へ導くようになる。この時、宰相中将は「命も絶えぬばかり」とかなり過剰に涙を流している。左衛門は年若い女房であり、宰相中将の過剰すぎるほどのアピールを見放すことができないのである。匂宮のケース同様、宰相中将の過剰なまでの涙に、思慮の浅い女房の心は動いてしまう。浮舟の女房であった侍従は匂宮の涙に絆されたものの、浮舟に會わせることはしなかったが、左衛門の場合は、四の君と宰相中将を引き合わせ、二人の関係を支援する役割を担っていく。同様に、女姿の男君付きの女房である宰相の君に対しても、涙によるアプローチが行われており、

なほ官耀殿の尚侍はしも限りなくをかしうて、人に心おかるる  
振る舞ひは思ひのどめられなんかしと、なほ思ひなされて、ま

たたち返り宰相の君といふ人を泣く泣く語りひ尽くして、いかなる紛れにかなりけん、御物忌固うて梨壺にもまうのぼりたまはぬ夜、入りにけり。  
〔とりかへばや〕巻二、二六六

傍線部のように「泣く泣く」相手を説得し、男君への仲立ちを頼むことに成功している。この場合は、女姿の男君に上手く逃げられ関係を結ぶことは出来なかったが、恋しさの涙によって女房を味方につけ、逢瀬に繋げているのが宰相中将の涙の特色なのである。宰相中将は実際の逢瀬の際にも、相手に対して涙を見せるが、中でも四の君に対しては、

中納言例の内裏の御宿直なる折々、夢のやうに導き入れたてまつるを、女君は、度ごとに涙にまつはれて、つゆにても人に気色聞きつけられてはいかがながらふべき身ぞと思し入りながらも、ほのかなる行きあひの折々、現し心もなきまで泣き惑ひ焦らるるさま、なまめかしうあはれげなるも、度重なれば見知られたまはずもあらず。  
〔とりかへばや〕巻一、二二六

傍線部のようにその過剰な様が描かれる。四の君は男女の関係を結んだのは宰相中将が初めてであり、あまり世間を知らない女性として描かれている。最初は宰相中将のことを拒む様子を見せたものの、何度も繰り返しアプローチされると、その心は揺らいでいく。宰相中将の涙は、相手に対して見せることに抵抗がないどころか、過剰なまでの涙によって、女房達のみならず四の君の心までも掴んでいくのである。

「まめ」な薫は「こらえる涙」で女性だけでなく男性も含めた周囲の人々から好意的に見られているのに対し、「色好み」な匂宮は「見せる涙」で女性の心を掴んでいる。宰相中将は「見せる」上に「過剰な」涙によって女性の心を絆している。これまで「色好み」な性格の類似が指摘されてきた匂宮と宰相中将だが、女性達への振る舞いの一つとして「涙」に着目すると、匂宮の「見せる涙」を誇張しているのが宰相中将の「過剰な涙」であると言えるのである。

#### 四 薫・匂宮から見る宰相中将像

『とりかへばや』は、女主人公が栄華を極める（女の物語）であり、その源流には「源氏物語」宇治十帖での浮舟の物語があるとされてきた。<sup>9)</sup> 本稿では、『とりかへばや』で重要な役割を担う宰相中将像を、薫・匂宮からの比較から検討してきたが、従来のように、「まめ」な薫／女君、「色好み」な匂宮／宰相中将という単純な対立構造だけでは人物造型を考察できないことが明らかとなった。薫と宰相中将はそれぞれ浮舟・女君を巡る三角関係を形成しており、女主人公を一途に思いながら物語が閉じられる。宰相中将は薫像を継承しているが、それは執着心だけでなく、〈女の物語〉の裏にある〈男の喪失の物語〉という作品構成の根本とも大きく関わっている。

具体的な人物像として宰相中将の「情熱的」「涙もろい」「色好み」といった要素は女性に対し「涙を見せる」点において匂宮と類似していることが分かる。宇治十帖では「こらえる涙」の薫と「見せる涙」の匂宮という対比で二人の涙が描かれているが、匂宮と宰相中将は「見せる涙」によって相手の心を掴む。特に宰相中将はその涙の表現が非常に過剰であり、その過剰な涙によって絆されていく相

手に女房のみでなく四の君も含まれているのが特色である。

宰相中将の人物像を『とりかへばや』以前に成立した宇治十帖と比較すると、女性を一途に思いながらも最終的にはその女性を失ってしまう薫一人の話を受け継ぎつつ、性格面においては「見せる涙」で相手を靡かせる匂宮との共通点が多く見られることがわかる。宰相中将は薫と匂宮の持つ要素を上手く融合させ、それを誇張したキャラクターと言えるだろう。それがよく表れているのが、女君の失踪を知った宰相中将に対しての描写である。

さらにたとへて言はん方なく、胸よりあまる心地して、人の色がましと見思はんこともたどられず、足摺りといふらんこともしつべく、泣きてもあまる心地して沈み臥したまひぬる御気色の、いみじくいとほしくわりなきを、見たてまつり嘆がる。

（『とりかへばや』巻三、三九三）

この「過剰な涙」からは、「色好み」な匂宮の性格を持つ宰相中将が、同時に、一人の女性に固執し続ける薫的な要素を持ち合わせていることが窺われる。だからこそその様子を見る周囲の女房は「いみじくいとほしくわりなき」と嘆くのである。宰相中将は当時のあらまほしき貴公子像として、薫と匂宮を融合し、誇張して成立したキャラクターと考えられる。『とりかへばや』作中でその宰相中将の人物造型を継承した性格として男君と帝が描かれていることも、宰相中将がある種理想的なキャラクターとして作られていることと無関係ではない。『とりかへばや』の作者は既存の物語を生かしながら、それを分かりやすくするためにあえてオーバーに描き、宰相中将の



ようなキャラクターを生み出したのではないだろうか。

本論文では宇治十帖の薫・匂宮に限定して考察したが、理想的な貴公子として真つ先に思い浮かぶ光源氏や、『とりかへばや』以前に成立した〈女の物語〉である『夜の寝覚』の男性達などとの比較を今後の課題とし、宰相中将の人物像にさらに迫っていききたい。

### 〔引用文献〕

本文引用はすべて小学館『新編日本古典文学全集』に依り、漢数字で頁数を示した。また、私に傍線を付した。

注(1) 宰相中将を「烏辭者」として注目した論文には、岡本美奈「栄華の物語を支える「烏辭者」——とりかへばや物語」の宰相中将——〔表現と創造〕No.5 二〇〇四年三月）などがあり、それとは異なる形で宰相中将を評価した論としては、中島正二「『とりかへばや』の宰相中将に関する若干の考察」〔《中世王朝物語の新研究—物語の変容を考える》 新典社 二〇〇七年、安田真一「『とりかへばや』宰相中将試論—欲望・恋情・焦り—」〔《古代文学研究 第二次》九号 二〇〇〇年十月）などがある。

(2) 拙稿「『現存『とりかへばや』の男性達—なぜ涙を流すのか—」〔《国文学目録》五五号 二〇一六年二月）にて男性達の涙を分析し、宰相中将像を基として男君・帝の人物造型がなされたと結論付けた。

(3) 西本寮子「『とりかへばや』と『源氏物語』—匂宮三帖への関心を視点として—」〔《源氏物語の展望》三弥井書店 二〇一〇年）

(4) 久保堅二「『今とりかへばや』宰相中将論—薫の執着の継承—」〔《国語と国文学》八八巻四号 二〇一一年四月）

(5) 男君の持つ計算高さについては(2)の拙稿に詳しいが、『とりかへばや』

の男君は女性達を冷静に評価し、その上で扱いを決めるような面がある。

(6) 前掲②参照。宰相中将からは後半部「情熱的」で「色好み」な性格が失われ、「情熱的」な面を帝、「色好み」な面を男君が継承していく。

(7) 鈴木貴子「涙から読み解く源氏物語」〔笠間書院 二〇一一年）

(8) 中村一夫「源氏物語の本文と表現」〔おうふう 二〇〇四年）

(9) 星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』—「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉—」〔《国語と国文学》八三—四二〇〇六年四月）など。